
双子の憂鬱

伊野村雅之

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

双子の憂鬱

【Nコード】

N6002U

【作者名】

伊野村雅之

【あらすじ】

15歳の誕生日、人知れず家出をした二人の少年たち。

そこで明かされる衝撃の事実―少年たちは壁を乗り越えられるのか。

ボケ・ギャグ・シュール一切なし、トリップ・パラレル満載のSK
ET DANCEの小説はここだけ！

初めに

涼華「何してたと思ってたら……雅之ー！落ち込んでて書けてない
と思ってたら、何読んでる、そしてなにゆえ執筆してるんだー！」

・久々、涼華の相棒カビゴンのBean登場。

Bean『たくさん待ったんだなっ！』

雅之「^{エルレイド}零士！力を……うあ？！」

零士のボールは手元になかった。

零士『いくらマスターとは言え、やっていいことと悪いことがあります。
今回は我もリアモンハウスに参加いたします』

雅之「ちょ、ちょっと?！」

涼華「Bean、最大級破壊光線！」

零士『私は気合い玉を……』

くピンポンパンポーンく

この度は“双子の憂鬱”に目を通していただき誠にありがとうございます。
います。この小説は間違いなく“SKET DANCE”であり、
決して“ポケットモンスター”ではありません（笑）。

繰り返しお知らせします。

この小説はもし藤崎佑助と椿佐介が15の時に出会っていたらという
想定元書いていたらこうなったと言う、所謂“二次創作”ではなく
“構築し直されたにすぎない小説”かつ、“自己満足ダメオ
タニート”が書いたものです。

決して期待して見てはいけません。

そのような心で見られたら泣きます。

（卑屈モードになります）（……メ）

なるべく日を空けないで投稿したいと思いますが、いつこの熱が冷

めるかと思うと少し怖いです（笑）

暫くは執筆モードですのでご安心を。

くピンポンパンポン♪

雅之「うぎゃああー！」

静美「……自業自得じゃん……」

YOUR NAME 君の名は (前書き)

第一章の話はほとんど、SKET DANCE第十巻のHappy Birthday&Happy Birthdayを参考に再構築された話となります。終わりの方はほとんど自分の案になってしまいますことを予めご了承くださいませ。

YOUR NAME〜君の名は〜

これはSKET DANCEより前の話です

1992年11月11日―

小さな町で大きな事故が―しかも二件おこった。

それとほぼ同時に、二人の双子が生まれた…それは二人の死と二人の生が輪廻のように廻ったものなのかもしれない。

6

―椿医院と書かれているバン型の車。激務で疲れていた椿院長は眠い目を必死に開きながら車を運転している。

「ふわあああ…（大欠伸）……だめだ、すげえ眠い………い、いかな。眠ってしまったら事故が………」

しかし、椿医師の臉は言うことを聞かずにゆっくりと強制的に閉じようとしている。

その頃、普通の自動車には藤崎茜音が慣れない車運転に苦戦しながら、身重の女性―桐嶋波瑠が苦しそうな表情でお腹をさすっている。

「アカネ、そんなに急がなくて大丈夫よ…？」「ちよつと黙ってて！緊張するから！」

三か月の段階で双子だということがわかっていて、波瑠は旦那である亮輔とともに二人の名前を考えてあった。しかし、茜には驚かそうと思って双子であることを隠していた。それは二人だけの秘密だった。

しかし、その亮輔は別の場所へ行ってから病院に向かう事になっている。彼にはやりたいことがあったのだ。

この場に旦那の姿がないのはそういうことだ。

―その矢先に一つ目の事故が起こる。

椿医師の運転する居眠り運転の対向にいるその乗用車がハンドルの

操作をほんの少し誤った。

視界が滲んでしまい、それを拭うほんの一瞬の事だった。

茜「きゃ?!」

ガッシャーーン!

二台の車の激突音が交通量の多い道路で響いた。

――椿医師はその激突音で完全に目が覚めた。自分の真正面で音が聞こえたからだ。

そして、その状態に愕然とした。…今、自分は居眠り運転をしていたのだ。間違いなく。

椿医師は急いで車を降り、すぐに乗用車に乗っている人たちの状態を見に走る。「大丈夫ですか!？」

茜はシートベルトとエアバックで気を失っている。見た感じ怪我はなさそうだった。

しかし、問題は後部座席の女性だった。その女性はお腹を守るように体を丸めて、頭に大けがをしていた。

椿医師は早急に二人を自分のバンに乗せて、近くにある自宅の医院へ連れて行く。

*

*

*

その同じ頃。

亮輔はあることをしていて連絡を受けた際に、急いで病院に向かって公園へと続く近道を走っていた。

「波瑠ちゃんの赤ちゃん、早くみたいなあ…！急がなきゃ、病院！」

しかし、それが叶わなくなるなんて露ほども考えていなかったのだ…

公園に差し掛かると、ボールが点々と転がっていった。「？」

亮輔は思わず足を止める。―そこに子供が一人、やってきた。

彼の姿は、依然同じ公園で見かけた子供のよく似ていた―大きな

っていた。

「あのガキ…まーた一人でボール遊びか。前にも危ない目にあつたのにーとと、こうしちゃいらんない。」

しかし、亮輔は胸の中がもやもやしながら振り返る。―自動車が、やってきていた。

「!」

亮輔は自然に体が動いていた。その子供を抱きかかえる。が―遅かった。

ドンッ!

車はそのまま走り去ってしまふ。

不幸にもその時間、そこは誰もいない閑散とした住宅街だった。

辺りには、静寂が戻った。―風の吹く音も、鳥の囀りすら聞こえなかった。

彼に助けられた少年は、一瞬何が起こったかわからなかった。―道路の上で転がっている彼を見つける。

―少年は顔を強張らせた。ただ、車がスピードを上げて横切っているのは分かっていた―

彼は少年を見つけるが…もう体を動かせないほどの大けがを負っているようだっただ。

「よお…無事だったみてえだな…え…と、タイスケ…つつたっけ？こ…怖かっただろ…へへ…」

少年は体の震えが止まらないようだった。彼はそんな彼を見て励まそうとするが…

「はは…大した事、ねーぜ…」

彼にはその体の痛みすら感じられなかった―自分の、死期を悟っていた…

路上に、自分が買ってきた妻への誕生日プレゼントと手紙の入った袋が転がっていた。

「おお…せ、せっかく買ったのに…壊れちゃったかなあ…」

少年はその花柄いっぱい袋を持つ。彼を見るとその表情は穏やかだった。しかし少年の表情は固まったままだった。

「ああ、サンキューな…へへ……それをオレの…カミさんに……つつつても無理か……」

彼は残った力で空を見上げ、親友と妻の事を思う。…子供に何も残せないことが悔やまれる。

袋を抱えた少年のタイスケに向かい、彼は力強い瞳で最後の言葉を告げる。

「…いいか、タイスケ。困っている人間に手を差し伸べられるような…強い人間になれ、いいな！…よし……もう、行け……」

少年は怖くて、その最後の言葉を合図に荷物を抱えて逃げるように走った。

―事切れてから、あたりに人が集まってきた。

「おい、あんた大丈夫か?!」

「救急車だ!」

*

*

*

その悲しい連絡はポケベルを通してすぐに椿医院に連絡が届いた。

そばには椿医師がいた。

泣き崩れる茜を支えると、助けなければいけないと決意を固める。

「…！まさか、ご主人まで事故で…」

「先生…波瑠を…波瑠を…！」

「必ず助けます！赤ちゃんも…必ず！」

そして、茜の意思は固まった。

「それでも、もし…もし波瑠の身に何かあったときは……赤ちゃんは私の手で育てます」

その茜の目には悲しさと決意に入り混じった瞳が写っていた。

椿医師はそれを見て、心持を固めた。

手術室に入った椿は桐嶋波瑠に、言わなければいけないことがあった。

「桐嶋さん…こんな時に言うことではないかもしれませんが……いえ、こんな状況だからこそ、今あなたにお伝えしなければなりません……」

椿は苦しい表情で桐嶋亮輔が別の病院で運ばれて死んでしまったことを告げた。

くしくもこの椿医院には今現在妻と自分の二人しか対応する人間しかいなかった。あとは事務の方たちだ。

妻はそれを聞いて愕然としたし桐嶋さんは涙を流した。

「リョウ…ちゃん、リョウちゃんが……」

「お気の毒です…私には掛ける言葉も……」

桐嶋さんの目から涙があふれるが、それでも力強い声で言葉をつづけた。

「せ…先生…」

椿医師はその声に静かに耳を傾ける。

「私の体の事は…いいです…早く…赤ちゃんを…」

「ええ…もちろんです。赤ちゃんを助けて、あなたも助けます。手^オ術を始めますよ」

しかし、波瑠は言葉をまだ続けていた。

「先生…外にいる茜には驚かせようと思って…内緒に…してたんですけど…お腹の中には…二人いるんです…赤ちゃんは、双子…」

椿医師は表情を硬くした。「…双子…！」

彼女の強い決意はまだ続いている。

「無事に…産みたい。私の体は…どうなってもいい…。どうか、赤ちゃんは無事に…」

「処置を始めますよ。気をしっかり持ってください！」

先生の奥様が処置にかかるうとするが、波瑠にはまだ言いたい言葉があった。

「先生…もし…私が死んだら」

椿医師は声を張り上げる。「死なせはしません！」

医師として、彼女を死なせるわけにはいかなかった。――医師として聞きたくない言葉だった。

しかし、波瑠の言葉は予想外のものだった。「赤ちゃんの事を…よろしく願います…」

椿医師は動揺を隠せなかった。「なっ…何を…！？」

「茜は多分…自分が育てると言うでしょう…でも…彼女は今…デザイナーを目指して…必死に勉強中…」

それは実際当たっていた。そしてそれは椿の意思を揺るがせる。さらに波瑠は続ける。

「その夢を…邪魔したくない…経済的にも…今の茜には…二人を育てるなんて…きつと無理だから…」

「そ…そんな心配は、今なくていい！あなたは生きるんです！！」

その言葉の力強さに波瑠は「はい…よろしくお願いします…」としか言えなかった。

だけど自分の体の事…もう、無理だつてわかってる。だけどせめて…リョウちゃんと私とで考えた、子供の名前だけは…伝えなきゃいけない。

「せ…先生。最後に一つだけ…」

「もう喋らないで！後で聞きます」

波瑠はその制止を振り切る。

「今…言わせてください。赤ちゃんの名前…もう…決めてあるんです」

「そんなこと聞きたくない！！もう喋らないで！」

しかしさらに言葉を続ける――

「人を――人を助けられるような人間になるように……二人が……協力して……右と左……佑助と――佐介」

子供は無事に生まれた……しかし、波瑠を助ける事は叶わなかった――

-

YOUR NAME君の名は（後書き）

「2011/7/5」

一愛^{ヒメ}「…なあ。なあ、スイッチ」

和義^{カズヨシ}『どうしたヒメコ？』

一愛「なんやこんなにエツライ重たい話に変わったやんか!!」

和義『作者の筆が良い物を書きはじめたようだ。結末もバッドエンドからハッピーエンドに変わる予定だそうだ』

一愛「ちょ、うおおおい！またえらい変わりよったなあ!!」

和義『この本文はほとんど手を加えてないがいくつが文を追加したらしい。なんと一晩かけて15歳の誕生日までこぎつけたそうだ』

一愛「アカンアカンアカン！作者、止まらないからって突っ走るな！あんた寝ろ!!ホンマ自己満足ダメオタニートやな!!」

雅之「ふあああ……」

一愛「喉の奥まで見えるあくびをすんな!!」

-

TEAR OUT BROTHERS 別けられた兄弟 (前書き)

短いです。これも参考になっているのは10巻です。

-

TEAR OUT BROTHERS 別けられた兄弟

―手術室に、ただ赤ん坊の声だけが響いていた。椿の奥さんの腕に双子の男の子が元気に泣いている。

椿医師は肩を落として、桐原波瑠の横に立っていた。―助けることは、叶わなかった…責務に襲われる。

「すみません、桐嶋さん…！力…及ばず…私が…あなたの命を…奪った…」

目からあふれる涙を拭い、決意の表情を浮かべる。

「責任を取らせてください。約束通り…お子さんは私が……」

―不意に、茜の決意の表情とあの言葉を思い出した。

（赤ちゃんは私が育てます）

椿医師の決心が揺らぐ。―双子を引き離すのは果たしていいことなのだろうか？

しばらく呆然としていると、妻の言葉が耳に入ってきた。

「おーよちよち。可愛いでちゅねー」

しかしそう言っている妻の顔は沈んでいた。

「本当に…可愛い赤ちゃん。二人とも…」

椿医師が妻と赤子たちを見ると、妻が続ける。

「…神様は、残酷ね。こんなに可愛い赤ちゃんが二人も生まれたのに…そのお母さんは亡くなって…」

涙が見える。――絞り出すような声だ…

「こんなに可愛い赤ちゃんが二人も生まれるのに…私たち夫婦には…一人も…」

椿医師は思わず目線をそらす。――そうなのだ、この夫婦には親から孫を望まれている。

しかし、タイミングが合わないのか、それとも何か問題があるのか、

この時点で子宝になかなか恵まれなかった。

脳裏に、親からの言葉が響く。

「お前にこの病院を継がせたのはいいが、まさかお前たち夫婦に子供が出来ないとはな…」

威圧する親父の顔が頭をよぎる。

「跡取りはどうするつもりだ。養子でももらうか？…プレッシャーを掛けるつもりはないが、大事な問題だ。よく考えておけ」

疲れ切った椿医師を見て、親父はふうとため息をつく。

「…近頃、顔色が優れないようだな。働きすぎか、それとも心労か…医者の不養生とはよく言ったもんだ…」

脳裏に過る言葉と表情―赤子たちの幸せか、それとも…

渦巻く感情は、彼に歪んだ決意をもたらした。耳元で心臓がうるさく響く―

悪魔が囁いた、そんな気がした。

「一人…赤ちゃんを……一人こっちへ……」

妻は彼の判断に驚いたようだった。

「あなた……！？今……？」

「―彼女に、無茶をさせるわけにはいかない……」

その言葉は建前だった。―自分の、保身のために、目の前の赤子の一人…弟の方を

目のつかない場所へ預ける。―妻に、手術室前にいる茜のもとに行くように言う。

硬い表情を必死に和らげ、妻は茜のもとへ行く。

「生まれました。元気な男の子ですよ」

茜は素直に喜んだ。

「う、生まれた…亮輔と波瑠の…赤ちゃん……」

しかし、波瑠の容体も気になる。佑助を腕に抱いた茜は矢継ぎ早に言う。

「は…波瑠……！波瑠は無事ですか！？」

妻は沈んだ顔をした。手術室から、椿医師も出てくる。

重い決断をした椿は、色んな意味を込めて頭を下げた。

「すみません……助けることが、出来ませんでした……！」

「波瑠……！ああ、波瑠——っ……！」

茜は赤子に負けず大きな声で泣いた。

病室で顔を掛けられた春と、赤子の佑助を見て、茜は涙を拭った。

「この子は私が…私が育てます」

椿医師はまた涙が零れ落ちそうな茜の横顔を、複雑そうな顔で見
ていた。

「私の親友たちの…大切な宝ですから」

―思えば、二人ともひだまり園という児童養護施設で幼いころから
の付き合い。

…高校時に片親のいる茜と亮輔、波瑠は親友になった。―だけど、
二人の放つ特別な絆にも見える間には入っていけないと、思ってい
た。

だけど、亮輔が言っていた天涯孤独―という言葉が頭に残っていた。

そして少したってから佑助がその、天涯孤独なのだと気が付いた。

…でも茜は信じていた。血のつながりだけが全てではないと、離れ
てもなおその絆は続くものだ、―茜は信じている。

だから、佑助だって私が育てると決意できた。

* * *

椿医師は翌日になって自分の判断が間違っていた事に気が付いた。

すぐにでもこの赤子―佐介を返してやらなければと、玄関に足向けるが、妻の抱えるその赤子を見て足が止まってしまった。

この赤子の愛らしさに、椿家は癒されていた。

平穏をもたらしてくれたこの子供を、…育ててみせる。立派に。

母親と同じ日に誕生日を迎えた赤子は、その日のうちに切り離されてしまった。

しかし赤子たちは周りのそう思った思いを知らずに成長した。

自分たちの片割れの存在を知らずに…何も知らずに成長していった。

TEAR OUT BROTHERS 別けられた兄弟 (後書き)

第一章はこれにて落着とさせていただきます。

次回から第二章へ出会った二人に入ります。

「2011/7/5」

R U N A W A Y 走り出した二人（前書き）

この回より、大幅に話を作りこんでいきます。

以降は、二日から三日に一回のペースになると思われます。

よろしくお願いします。

-

RUN AWAY 走り出した二人

誕生日前―藤崎佑助はたまたま母の茜の部屋からナンバリングされたビデオテープを見つけていた―

そこには茜と、亮輔という名の、俺に似た人物、波瑠という名の美人の女性の三人が写っていた。

佑助はそこで父親の顔を初めて知った。―第一印象は、俺に似ているということだった。しかし、そこから佑助は胸に靄がかかり始めていた。

奇妙に胸に残る引っ掛かりは、ナンバリングされたビデオテープを順番に見ていくと次第に形をあらわしてきていた。

今日は周りの空気を読んで見るのをやめていたが、それは結果的に正解だった。―茜はその日珍しく早めに帰ってきたからだ。

ちょうど勉強しているところだった。―しかし、手は勉強していても、頭の中ではその靄を晴らそうともがいていた。

―同じ頃、何かが違うと感じ始めていた少年がもう一人いた。

彼もまた誕生日前の椿佐介だった。

何が違うか、なんてわからなかった。ただ漠然と、何かがおかしいと。

護身術に武道を習っているが、それをいざ実践に移すとなるとなかなか踏み出せない。

何か変わらなきゃいけない。そう思っていた。

―

そして、決定的な映像を目の当たりにする藤崎佑助。

だけど、話す事はかなわなかった。自分の誕生日が明日に迫っている。

せめてその時だけは笑顔でいたい。…だけど今日は、何もかもが嫌だ。

誕生日前日だっていうのに…最悪だ。

―誕生日前夜。…椿佐介も衝撃の事実を目の当たりにしていた。

両親のカルテを偶然見る機会があった―そこには二人ともO型の字が書き込まれていた。

自分の血液型は―A B。…間違いない。…でも、言えない。

悲しませたくない。…僕をここまで育ててくれた人だから。

―家にいるのが、堪らなく苦しい。息が詰まりそうだ。

―この事実は、辛すぎる。…初めて、家を飛び出した。

「―あ？ 佑助、外行くんなら牛乳プリン買ってきて。」「杏仁豆腐もおねがい」

「―……」言いかけてやめた。何も言わず、佑助はこっそり忍び取っていた二人の写っている写真と財布を持って外を飛び出した。

「僕、これから友達の家に行くんだ。誕生日会をやってくれるんだって。明日には帰るよ」

「そうか。うん、楽しんでおいで」「いつてらっしゃい、佐介」

佐介は初めて嘘をついた背徳感から逃れるように外を出た。

「そうか、俺には……両親がいないのか……。心の中に空いた穴は、どんなもので埋まるんだろう。俺は両親の写真一枚持って、走り出す。」

「い、勢いで飛び出しちゃったけど……どうしよう。……ううん、悩んじゃいけない。とにかく、眠れるところを探そう。それからでも遅くはない。」

-

RUN AWAY} 走り出した二人（後書き）

「2011/7/5」

「愛^{ヒメ}「うっわ、椿まで飛び出しまった」

和義^{カズヨシ}「ボッスンはあれだが、椿は意外だな…しかし、胸の内にもやもやがあるときが一番つらい時だからな」

「愛「…せやな」

雅之、大あくび。

雅之「ヤバい、眠すぎる。」

15 - years Birthday (前書き)

SKET DANCEマニアには推参な箇所を多く散りばめた小説です。伊野村君が書いてメールを送り、中峰涼華が推敲する箇所を的確になった結果もう少し纏まる筈だったこの節がかなり長くなつてしまいました。

参考にした話は同じく10巻と、今回は修学旅行に忍び込んでいたものをこちらに書き起こしました。

― 注意。

彼らは中学三年につき、この時期にここにいることがおかしいとま
ず思うでしょうが、とりあえず無視の方向でお願いします。 ^ | ^ ;

15 - years Birthday

2007年11月11日

公園のベンチで体を休めていた佑助は太陽の日差しで目が覚めた。
しかし、なんか妙な圧迫感がある。おまけに体の上になんか暖かい
ものが掛けられている―毛布だ。

「んおあ!？」

「ふわっ?!わああ!！」

ベンチの端の方で眠っていた佐介はすぐ横で聞こえる声に飛び起きて、ベンチから転がり落ちた。

ベシン!

「あたたた、…ごめんなさい。驚かせましたか？」

佐介は背中であちたのが幸いしたのか、大した怪我にはなっていなかった。

「…あ？てかこの毛布、お前の？？」

「はは、きょう一日だけの家出です。―あなたがこのベンチで寒そうに寝ていたから、僕もここで寝てみました」

「ふーん？お前も？」

「“お前も”？へえ、あなたも一日家出ですか？」

―不思議な奴だ。佑助は見下ろしながら少しだけ笑っていた。

―不思議な人だな。佐介は見上げながら困ったように笑った。

二人はベンチに座りなおして自己紹介する。

「俺、人偏に右に助けるって書いて、佑助。お前は？」

「僕は、人偏に左に介するって書いて、佐介と言います」

地面に字を書きながら、互いの自己紹介を済ませる。

―不思議なもので、文字の雰囲気は似ていた。

「…なんか、不思議だな。誕生日に似てる人と会うなんて偶然にも程があるっていうか……」

佐介は驚いて、佑助の顔を見る。

「え、あなたも今日が誕生日ですか？僕も今日誕生日ですよ」

佑助も驚いて顔をあげる。

そして―「誕生日の日に家出って―」

声が綺麗にハモる。次の瞬間、一緒に噴出した。

「あははは！ここまでハモるか？！」「ははは。なんだか、久しぶりに笑った気がします」

そういえば、と佑助も空を見上げる。

「俺もここんとこ笑ってなかったかな。本当の両親は別にいるって知ってから全然笑ってなかったな」

佐介も同じく、空を見上げる。小春日和のうらかな陽気が、心地いい。

「僕も、両親は別の人って知って辛かったです。っ……え？」

一陣の風が吹き抜けて、落ち葉が舞い上がった。リュックを持つ椿佐介。

写真一枚と財布を持つ藤崎佑助。――二人はこの日、出会うべくして出会った二人だった。

笑い顔はその一陣の風にかき消されていた。

佑助は右ポケットに入れていた両親の写真を見て、やっと合点があった。

佐介を、どこかで見た顔だと思っていた――そうだ。身重の女性に……よく似ていた。

—じゃあ、彼は…まさか……

—彼は…

「…双子…？」 佑助が先に口を開いた。

それにしても不思議なことがある。どうして顔が違うのだろう？

「そういえば双子って、一卵性と二卵性で別れているんですよね」

何をテンパったのか、佐介は見当違いの方へ話を持っていく。

「あ？イチランサー…、ニランサー？」

「要するに、鏡みたいに顔のパーツが似ていると一卵性。でも僕らみたいに顔の部分部分が違った双子っていうのは二卵性なんです」

「そもそも、どうして二卵性になるんだろうな？」

佑助はベンチに座りなおした。佐介もそれに倣う。

「えーっと…ですね。“多排卵は妊婦自身や母方家族の二卵性双生児出産既往と相関があり、高ゴナドトロピン血症との関連が示唆されている。ゴナドトロピンは経産により上昇する傾向にあり、経産婦が双子を出産する可能性は初産の場合よりも若干ながら高い。遺伝子研究においては双子の両親のうち母親の持つ要因だけが二卵性双胎妊娠の発生に影響を与える。父親側の要因が母体側に何らかの影響を及ぼし、多排卵を導くという可能性はない。？Wikipedia”」

「ゴナドトロピン？なんかよくわかんないな。」

「うん、ぼくも少し調べただけですからよくわかりません」

「ふーん。…お前って手はどっち使ってた？」

佑助の唐突で、不思議な質問にはもう慣れたようですぐに答える。

「名は体を表すっていうのでしょうか。ぼく、左利きです。あなたは？」

「俺右利き。世の中ってさ、なんでも右が先だったりするよな？」

「そうかも。…じゃあ、もしかして君の方が先に生まれたのでしょうか。そうなる」とあなたがお兄さんってことですか」

「…なんか他人行儀だなあ。十中八九、俺らは兄弟なんだろ？本来は名前で呼びたいけど…」

佐介は困ったように肩をすくめる。

「しょうがないです。だってそれを知ったのは今日ですし…いきなり名前呼ばれても戸惑うだけですよ」

佑助は佐介のもっともな意見に妙に納得した。

「確かに。…なあ、もう少したったら図書館開くし、そこでいろいろ調べてみないか？」

腕時計を見るともう十時だった。—とつくに学校が始まっているが、二人は気にしている様子もなかった。

「そうですね。ぼくも本当の両親の事を知りたくて家出したようなもので」

「…理由はおんなじ、か！」

佑助はすくつと立ち上がり、尻についた砂埃を払う。

佐介は手早く毛布をきれいに折りたたみ、リュックに詰め込む。

ふと、目の前に右手が差し出された。「―行こうぜ」

―柔らかな秋の日差しを受けた佑助の顔は、どこか懐かしさがあつた。

「…はいっ！」佐介も立ち上がり、その右手を左手でつないだ。

心は穏やかさを取り戻していた。―通り過ぎる人々の声が聞こえる。

「―あらあら、仲がいいのね」「なんかかわいいー！」

佑助は佐介と顔を見合せてまた笑顔になる。佐介もつられて笑っていた。

*

*

*

図書室のコンピュータールームで自分たちの生まれた日を入力して検索にかけると、20件ほどのデータが呼び出された。

その中でもトップになっているのが交通事故の二件の見出しだった。

― ひき逃げか。 男性一人死亡

― 居眠り運転で車激突、女性一人死亡

佑助は自分の持ってきた写真と顔写真を確認する。

― 間違いなかった。この二つの事故が原因で両親は亡くなっていた。

驚くことに、居眠り運転をしていた人物が椿医院の院長だと、二人は初めて知った。

（― そうか、本来なら産婦人科のある病院へ行くはずだったんだ。でもその事故が起きて、椿さんは母さんを助けようとしてくれたんだ）

（…でもそれは叶わず、死んでしまったんですね……でも、それだけじゃ僕たちが別れた原因は分かりませんか）

佑助は画面を見つめてしばらく考えていたが、しばらくして顔を上

げた。

（……そうだ、父さんが死んだ場所に行ってみないか？）

（え？どういう事ですか？）

佑助は小声で続ける。

（何か手掛かりがあるかもしれないじゃないか。ここは公園で、ここを出たところでひき逃げに遭ってる。いくら住宅街とはいえ、誰かがまだ覚えている可能性は高いと思うんだ）

（でも、目撃証言はないんですね？）

―佐介には一見それは意味のないことなんじゃないかと思った。

（きつと他にいるはずなんだ。子供が成長してたら誰かが見舞いに来ている可能性はある…筈だ）

（どうしてですか？）

（VHSで見たんだけど、父さん結構いろんな人助けたり助っ人み

たいなことをしたりしてさ…もしかしたらこの事故も誰かを助けて事故に遭った可能性はある…筈だ」

なるほど、と佐介は小さく頷いた。（そういう事なら、善は急げ。ですね！あ、ねえ今度そのVHS見せてください）

（ああ、良いぜ！） 佑助と佐介はそつと図書館を後にして、桐嶋亮輔の事故現場に急いだ。

「あ、ここだ。この公園の前だ」

公園の時計を見ると、もうお昼だった。

「ーもうこんな時間か…お？」

佐介はどのタイミングで買っていたのか、カロリーゲットとポカリスイツトの入った袋を誇らしげに持っていた。

「公園のベンチで食べましょう！」

「おう、そーだな…まあ、流石に人はいないわな」

平日のお昼だ。この時間にこの公園に人がいるのは珍しいだろう。

辺りは閑散とした住宅街で、ひっそりとしている。葉っぱの擦れる音、雀の鳴く声が穏やかな時間だと教えてくれる。

佐介の買ったカロリーゲットはチョコレート味だった。

「そっぴゃ、こつぷの初めて食うかも」

「僕も。でも効率よくカロリーをと思つてこれを買いました」

「流石、育ての親が医者なだけあるな」

「それに、あまりジャンクフードとか食べたことなくって」

佑助は少し驚いた。「えっ、まじ?!」

「クッキーとかロールケーキとかはよく食べていましたけど、袋に入つたお菓子つてあんまり食べたことないです」

佑助はへーと言ひながらポカリスイットを一口飲む。

ちなみに右利きの佑助は右側に座つてポカリスイットのペットボトルを体の左側においていて、

左利きの佐介は左側に座ってポカリスウィットのペットボトルを体の右側においていた。

その方が話しやすいのだ。

――しばらくはお菓子事情について話していた。

「――強いて言えば、結構渋めのお菓子は好きです。茎わかめとか」

「茎わかめ！？しつぷい、渋い！！そこはふつつポッキーでしょー」

「後、あたりめとかさきいかとかのおつまみ系とか」

「おっさんか！じゃ、ポテチとかのスナック系は食べたことないんだ」

「はい。あと清涼飲料水とかも飲んだことなくて」

「清涼…ああ、コーラとかペプスとか！？――まあ、炭酸は骨溶かすとか言うからな…」

「骨が溶けるんですか？！怖いですね…」

「よっぽど飲みすぎればの話だよ！あの手のものは、一・二週間に一回飲むくらいなら大丈夫だよ」

不意に、佐介は笑顔を浮かべた。

「実をいうと、ぼく友達少ないんです。特にこんな風に笑いあえる友達なんていたことはありませんでした…こんなに楽しいんですね」

「—そうか。じゃ、今日は今までで一番楽しい日ってことか？」

「そうですね！」

「後さ…敬語やめにしねー？なんかこうむず痒くてよ…双子なんだからさ、気兼ねしないで話していいんじゃないの？」

少し照れくさそうに佐介がはにかむ。「家では敬語が普通で…そういうフランクな家族って、なんかいいですね」

「……そっか、気にしなければいいのか。いや、俺の方がデリカシ—なかったわ、ごめん」

「そんな、謝らないでください。―あれ？」

その時、佐介が公園の前の人影に気付いた。佑助も振り返る。

公園の入り口の横に、花束を立てかける青年がいた。手には何やら袋を持っている。

佑助は嬉しそうに立ち上がる。

「…予想的中。あの人に聞いてみようぜ」

「はい」

―人影は公園からくる二人の人物が目に入ってきた。

「…あ」

その内の一人はあの人に良く似ていた。こちらから話そうとすると、向こうから話しかけてきた。

「あの。この場所で十五年前の今日に桐嶋亮輔っていう人が死んでいるのが発見されたのですが、何か知っていることはありませんか

？」

人影はそこで恩人の名前を初めて知った。――ああ。そうか、…その人の、息子か。

「…ああ、知ってる事ならすべて話すよ。俺はその桐嶋亮輔って人に助けられた、三島泰介だ。…君たちは？」

「えーっと、俺は桐嶋佑助。こっちは佐介。俺たち、双子なんです」「初めまして」

三島泰介は佑助と佐介を交互に見る。

「へえ、双子。…確かに似ているね。それじゃ、…うーん。どこから話せばいいかな？」

泰介は少し悩んだ。

「あなたが知っている限りのことを話してください。僕たちはその人の事を知りたいんです」

そう言ったのは佐介だった。「――僕らの生まれたその日に…死んでしまったので」

そうか、と口の中でつぶやく泰介が、話し始める。

「君たちの推察通り、ぼくはその亮輔って人に助けられたよ」

泰介は思い出す限り事故の状況を話してくれた。（忘れた方は“君の名は”をご覧ください）

「…てところかな。……まだガキだった俺はわけもわからず、ただただ怖くてその場から逃げちまった…あの後、ここで事故に遭った人が亡くなったと聞いた。俺のせいだ…ってずっとずっと後悔してきた」

泰介はあの頃の自分が取った行動を悔いていた。しかし、その顔にはどこかすがしさも浮かんでいた。

「でも、あの日君たちのお父さんに言われた言葉ははつきり覚えてるんだ。“困ってる人に手を差しのべられるような、強い人間になれ”ってあの言葉をね」

泰介は二人の顔を見て、言葉をつづける。「俺はその言葉に恥じない人間になりたいと思って生きてる」

「11月11日―俺の命の恩人の命日：俺は毎年この日にこの場所に来てるんだ―やっと、その恩人の身許が分かった。桐嶋亮輔さんっていうのか」

しかし、佑助が迷いなくこの場所に来たのはVHSをこっそり見続けていたからわかった事で、あまりほめられたことではなかった。
…無論、それを佐介と泰介が知る由もないのだが。

（佑助さんの言ったとおりでしたね）（まあな。でもまだちょっとした謎がある…）

そのちょっとした謎は泰介の手の中にある袋だった。佑助がそれを見ていると、泰介は気が付いた。

「ああ、そうだ。これを君たちに」

「なんですか、これ？」

佐介が問いかけるが、佑助にはそれがどういうものか察しがついていた。

「奥さんのプレゼントだったらしい。中に手紙が入っている」

予想外の言葉に、二人ともその袋を驚きの顔で見つめていた。

-

15 - years Birthday (後書き)

「2011/7/8」

「愛、なんか凄い事になってんなー」

正文「^{マサフミ}へー、桐嶋先輩たち、こんなことがあったんですね」

「愛、固まる。顔面蒼白。」

「愛」：スイッチが、しゃべったあああ!？」

正文「あ、どうも。僕^{かすにい}和兄の弟の笛吹正文です」

「愛」ユーレイ!!??」

正文「違いますよっ！失敬な！なんでも作者さんの意向で僕が生きていたらっていう話のもとSKETDANCEが再構成させるようですよ。ですから、漫画のSKETDANCEとは切り離してくれると……って、ヒメコ先輩？」

ヒメコ、気絶中。

正文「…本当にお化けとかユーレイダメなんですネ、ヒメコ先輩…」

雅之「…てなわけで、そんな感じで今SKETDANCEにディープに嵌っています。暫くはこれ一本でやっていこうと思います。諸先輩方には何人が配置換えがごさいます。お楽しみに！」

涼華「ちよつとおかしい個所があつたので書き直したわ。ここ違つとちよつとおかしいものね」「2011/9/7」

-

L e t t e r 波瑠への手紙（前書き）

ほぼ漫画の会話と化してしまっただため出すタイミングを見ながら、ハラハラしながら待ってたら今度は別のに嵌ってしまっただめになか出すのが遅れてしまいました。

一か月前にはできていたこの作品ですが、これもかなり難産でした……！

では、どうぞ。

-

Letter 波瑠への手紙

二人は夕暮れの川辺の土手に座っている。「ちょっとした謎って何？」

佐介は半日して少しだけ言葉が柔らかくなっていた。

「俺、今母さんたちの親友だった藤崎茜って人に育てられてるんだけど、どうにも話が食い違ふところがあるんだ」

「食い違ふ？どう食い違っているの？」

――藤崎茜がかたくなに亮輔の事について話したからないのは何故か。答えはこの袋の中にあると佑助は確信していた。

袋の中に入っていたのは女性ものの時計――11月11日の2:30で半分つぶれてしまった箱の中にあつたその時計が壊れて止まっていた。

「VHSによると、父さんはパチンコや競馬なんかの賭け事は一切したことがなかった―けれど、このプレゼントを買った時にどこにいるか、と言われたら……」

佐介はちよつと考えてすぐに分かった。「あ、そうか！照れくさいからプレゼントを買ってたって言えなかったんだ！」

「その時に賭け事をしてたって言われたら、父さんの事をかたくなに話したがない理由も頷ける」

袋の底に手紙を見つけて、それを佑助と佐介は読む。

“――波瑠へ。今日は誕生日だったな、11月11日。覚えやすくて助かるよ”

「――」「母さんと…同じ誕生日なんだ、ぼくたち」

少し動揺しながらも、更に手紙を読み進める。

“今日は前から目をつけていたプレゼントを買いに来て、そのまま喫茶店で手紙を書いている。ガラじゃなくて、ちよつと恥ずかしいけど”

「当たってたね」「そうだな…きつと、この手紙を書いた直後に陣痛の連絡を受けて…」――瞬言葉に詰まる。

二人は黙ったまま手紙に目を通す。

“もうすぐ俺たちの子供が生まれるな。凄い事だぜ！俺たち二人にとっては特別な意味を持つ素晴らしい出来事だ。本当にこれ以上の幸せはない！”

手紙はもうすぐ子供が生まれてくるという幸せに満ち溢れていたものだった。

―佑助と佐介の目に、少しずつ涙がたまる。

“どんな子供が生まれてくるかわからないけど、紛れもなく俺と波瑠の血を半分ずつ受け継いだ家族だ。大切に、大切に育てよう。大変な出産になると思うけど、頑張って元気な赤ちゃんを産んでくれ。誕生日おめでとう”

二人が、どれだけ待ち望んで自分たちが生まれたのかが、よくわかった。―なのに…そんな幸せな日を迎えていたのに…二人は死んでしまった。

手紙は二枚あった。佐介が気付いてそれを読む。

“それから、これから生まれてくる子供たちへ。生まれてきたら覚悟しとけよ！うんと可愛がって、叱って、俺の中にあるものを全部伝えてやる。まずは無事に生まれてきてくれよ。そして親思い、兄弟思いの人間に育ってほしい。…俺も母ちゃんも、人の助けのおかげで生きてこられた人間だ。だから俺は、いずれは人の役に立てる

人間になりたい。困っている人を助けたいんだ。俺の子供にも、そういう人間になってもらいたいと思ってる。―俺も、ようやく親の気持ちになってきてるのかな。今のうちに書き記しておきたい事があるんだ。俺が今の時点で、子供に伝える俺なりのメッセージだ。仲間は大だ。助け合って、絆を一生大切にしろ。人に裏切られても、自分は絶対裏切るな。そして―困っている人がいたら通り過ぎるな。無事に生まれてきてくれたら、また何度でも言ってやる。生まれてくれてありがとう。父より”

最後の方は涙で視界が霞んでなかなか見えなかった。

「…正直、最初に知ったときは…勝手に死んでふざけんなんて思ってた…でも、そうじゃなかった…俺たちは少なくとも、望まれて生まれてきたんだ。………っ…父さん……母さん……！」

佑助が流した涙は、悲しみに暮れた涙じゃない。暖かさに触れた、溢れる思いが涙となって頬を濡らしていた。佑助の左手に持っている、波瑠と亮輔の写真が二人にやさしく微笑みかけている。

佐介も、涙を抑えられなかった。―生まれてくれてありがとう。この言葉が、胸の奥にしみ込んだ。―僕はいららない子じゃない。…ずっと、胸に溜まっていたものが自然と流れ落ちていくような気がした。

―日が暮れる前に、二人は椿医院の前に来ていた。「…俺たち、ここで生まれたんだ―そうだ。佐介、これお前が持ってる」

佑助は波瑠と亮輔の写真を、袋と共に渡した。「え?...僕が持っていていいの?」

「俺さ、ちゃんと話さないまま出てきちまってるから...それにVHSをこそこそ見てたってことも白状しなきゃなんねえ。ちゃんと話さなきゃなんねーから...」

「...わかった。じゃ、入るよー」

佐介はその袋を受け取って、玄関の扉を開ける。

「ーただい」

「お誕生日、おめでとう!」

クラッカーの音と、ユニゾンで聞こえた声に、佑助と佐介は仰天した。

「ー佐介?突っ立ってどうした?」「ほら、ケーキも用意したのよ」

優しくそばに立っている椿夫婦に向かい、佐介は頭を下げた。

「ごめんなさい！僕、嘘ついてた。僕の誕生日を祝う友達なんかないの」

すると、今度は椿夫婦が驚いた。「え…？」

「―俺が説明します。あ…初めまして、藤崎佑助です」

佑助は頭を軽く下げて挨拶した。椿夫婦は驚きで声が出なかった。

その表情は恐ろしいものを見てしまったように凍り付いていた。佑助は佐介と会って今日何をしたのかを二人に話した。

「それに…佐介を見たらよくわかります。とても愛されて育てられたんだなあって…今度義母さんかあも連れてきてよろしいでしょうか。―もちろん俺からちゃんと全部話すまでは時間がかかってしまいますが…じゃあ、俺は家に帰ります。義母さんも瑠海も心配しているし…では、また後日」

椿夫婦は優しく笑ってくれた藤崎佑助を見て、佐介にもっとちゃんと話そうと心に決めたのだった。

佑助は玄関に足を踏み入れただけで、すぐに家路について走り出した。―一つの希望が、今の佑助を照らしている。その希望は佐介の

存在に他ならなかった。

もう、一人じゃない。―それに、大切な家族が他にもいたことが分かった。藤崎茜が父親について話したがないのも理由がわかった。きつと、茜が父親に好意を持っていたこともあるのだらうと。

二人に対して負い目があったのと、色んな思いが入り混じった結果佑助に伝えなければいけない事を隠してしまったのだ。―それを責めるのは間違っている。だから、まずは今日何をしていたかを素直に話す。

今までのVHSを黙って見ていた事もちゃんと白状する。―助け合って、絆を一生大事にしろ。―父さんのあの手紙の言葉で、もう一度絆を取り戻すには時間と話し合いが必要だけど、大事にしていきたいから全部白状する。もし、あの手紙に会えなかったら、絆の再建はより難しくなっていたかもしれない。大事なものも見えていなかったかもしれない。

―今日、佐介に出会えてよかった。今日、三島泰介さんに出会えてよかった。もしこの二人に出会えていなかったら、大事なものも何も知らないまま自殺するところだった。

……もう、迷わない。父さんと母さんの分まで精いっぱい生きる。それが、佑助の生きる道になった。

道は最初からあった。世間の暗闇で見えなくなっていただけ―今、その道は光に照らされて煌々と輝いている。

義母さんと瑠海に頼まれていたものと、ご機嫌直しにジャンボシュークリームをコンビニで買って外に出ると、藤崎茜の姿が横切るのが目に入った。

「―義母さん？」と佑助が声をかけると、茜は足を止めて振り返った。

「―佑助！！あんたこの一日何してたの！！」

パチン！ 平手で顔をはたかれ、佑助は踏ん張った。受け止めたのだ、すべての事実も、すべての思いも。

「―それは家に帰ってから話すよ。瑠海も俺を探してんのか？」

妙に大人っぽくなった佑助に、茜は驚いていた。それに、平手を顔に受けて痛い筈なのに、何もその事について言わない。ただ気になるように頬に触れるだけだ。

「え？…！」

一瞬その姿は昔の亮輔を思い起こさせた。人懐っこそうに笑う顔―本当に、あの人と同じ顔だ。

家に帰って、佑助と茜は顔をあわせていた。

「―あんたの友達のところ片っ端から電話を掛けたのに、どうして誰も知らなかったの？」

「俺は全部話す。だけど、瑠海にも聞いてほしいから瑠海を待つよ…いい？」

佑助の言葉は力強かった。有無を言わせないその表情は―母親の波

瑠にそっくりだ。茜はただ頷いた。

佑助は用意するものがあるから、と部屋に向かった。茜は瑠海にすぐ帰るようにメールを送った。

ものの数分で、瑠海は帰ってきた。

「あつ！！どこ行ってたの、お兄ちゃん！？瑠海、めっちゃめっちゃ探したんだよ！」

腕にアルバムとVHSを抱えた佑助を見つけ、瑠海は声を荒げた。

「とりあえずリビングだ。そこで全部話すー後、買つといたぞ。牛乳プリンとジャンボシュークリーム…後、義母さんの杏仁豆腐も」
佑助は以前の行動から、今日のこと―そして自分が双子の兄であったこと、その弟に会ったこと、父さんの手紙に会い希望を持ったこと。

何もかも全部曝け出した。その都度、茜と瑠海は驚いていた。特に双子の弟の件になると、茜は椿医師のことをなじった。

しかし佑助は佐介が愛されて育っていること―それが解っただけで、充分だと茜を諭した。どんな理由があれ、椿医師は佑助と佐介を救ってくれたことに変わりはないのだ。

兄弟が別れてしまったのはまだ他に理由があることを佑助は茜に言う。だけど、その理由を知った時に椿医師を怒ることはいらないでほしい。―事実を受け止める事を約束してほしい、佑助はそう茜に言った。

「―それにさ、義母さんも、瑠海も家族だっつーことに変わりはねえってわかってる。血の繋がりがりじゃない。…俺らはいろんな人たちの手助けでここまで育てられてきた。それがなかったら…いや…佐介と出会わなかったら、泰介さんと出会って手紙を受け取ってなかったら…これから先、生きる強さを手に入れられなかったかもしれない。いろいろ混乱はしてたけど、今はもう全部理解できた。…俺は本当にラッキーだ。義母さんがいるから今の俺がいる……親になってくれたのが義母さんで本当に良かったよ…佐介も、いい家族に受け入れられて愛情いっぱい育てられているのがわかった。それってさ、俺もそうなんだなってわかったんだよ」

佑助の胸の内を聞いて、茜も自分の胸の内を明かすことに決めた。

「―亮輔と波瑠の間に子供が出来たと聞いた時、本当に嬉しかった。…ホントいうとね、私はちよつと亮輔が好きだった」

瑠海は驚いた顔を向けて佑助を見たが、佑助は顔色一つ変えなかった。まるでその答えを知っていたかのようにだった。

「だと思った。父さんが母さんに誕生日プレゼントを買って、いざ家に帰ろうと電話したら俺たちが生まれそうって聞いたんだろっね——そんな時にパチンコとか競馬してたって聞いたなら、間違いなく義母さんは父さんについて話したがない、その理由は解るよ」

「……そうだったの……話を戻すわね。もちろん、波瑠の事も同じくらい大好きでね。二人が結婚して血の繋がった……それも二人の子供が生まれてくるなんて私は何にも知らなかったけど、それはまるで自分の事のようにうれしかったのよ。……あの二人にこんな運命を背負わせた神様を、私は少しだけ恨んだわ。でもそれよりも、二人と親友だった事や過ごしていた時間の方が大切だったから……」

茜は言葉に詰まり、目から溢れ出す涙を拭ってから、話を続ける。

「……それでも、波瑠の事故は私のせいだっけと苦しかった。何度罪悪感に押しつぶされたかわからないくらい。きつとそれは椿さんも同じだったのね。あなたは二人の血を間違いなく受け継いだ一人の子供……あなたの親になる事にためらいはなかった。……そして、あなたがいたから私は救われたの。私もあなたと同じ——あなたがいたから今の私がいるの。——もちろん瑠海もね」

「——じゃ、ひとまずお誕生日のケーキ持ってくるね！」瑠海は顔を明るくさせて、台所に冷蔵庫の中にあるホールケーキを持ってくる。

「……佑助、うまれてきてくれてありがとう」茜のその言葉で、佑助

は全部話してよかったと思えた。――昨日の夜、漆黒の闇に沈んでい
たとは思えないほど、心は穏やかだった。

-

L e t t e r 波瑠への手紙（後書き）

「2011/7/5 - 8/12制作」

「2011/9/7投稿」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6002u/>

双子の憂鬱

2011年10月9日18時26分発行